
それが正解 改訂版

春谷公彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それが正解 改訂版

【Zコード】

Z0266BA

【作者名】

春谷公彦

【あらすじ】

夏休みのある日、海にやってきた大学生の猪狩康平、矢式奈美香、藤井基樹、新川怜奈の四人。その晩、ホテルで女性が死体となつて発見される。現場は密室。彼らは、たまたま知り合つた探偵・真崎と共に事件に挑む。

登場人物

・〇大の学生
猪狩 康平
矢式 奈美香
藤井 基樹
新川 怜奈
〇大一年
〇大一年
〇大一年
〇大一年

・ホテルの客
真崎 和哉
秋山 美冬
尾崎 駿介
中井 夏美
武井 嘉男
武井 紀子
・探偵
〇L
フリー・ライター
H大一年
自営業
主婦

・その他の人々
林拓馬
林凜子
高石 貴裕
大竹
竹口
・ホテルのオーナー
拓馬の妻
ホテルの従業員
刑事
刑事

プロローグ

「海に行こう！」

すべてはこの一言から始まった。

午後八時。ここは居酒屋の一室。猪狩康平、矢式奈美香、藤井基樹、新川怜奈がそこに集まっていた。

彼らは〇大の一年生であり友人である。彼らが友人となつた経緯は定かではない。ただ、なんとなく行動を共にし、ただ、なんとなく暇があれば四人集まって飲んでいるわけである。

そして、ただ、なんとなく友人なのである。

今回はテストが無事終わり、夏休みを迎えたことによる飲み会だつた。

先ほど、ビールジョッキ片手に「海に行こう！」と言に出したのは藤井基樹である。

彼は坊主頭が伸びたようなソフトモヒカンで、見た目の通り活発な青年だ。

「どうせなら泊まりだ」誇らしげに藤井が言つ。

「お、いいねえ」そう言つたのは矢式奈美香。

積極的に賛同し、笑顔でうなずく。赤みがかつた長髪が揺れた。

「いつ？」新川怜奈が尋ねた。

彼女も表情は明るい。セミロングで、奈美香と対照な黒髪が印象的な女性である。

「いつでも。なんてつたて夏休みだからな。」なんこつのから揚げに手を付けながら藤井が答えた。

「どこに？」ビールを飲みながら聞いたのは猪狩康平。

行く前提で聞いているのだろうが、その表情からは肯定的な感情がうかがえない。

「海」当たり前だといわんばかりに藤井が答える。

「いや、だからこの？」呆れたように猪狩は聞いた。

「うーん。どうすっかな」藤井は石焼ビビンバを皿に盛りながら考
えている。

決めていなかつたのか、と呆れ顔のままで猪狩はため息をついた。
男にしてはわりと長く、くしゃくしゃになつた髪をかいた。

「おいおい、ため息なんかつくなよ」

「あ、私いいところ知つてるよ」と怜奈。「伯父さんがやつてると
ころなんだけど、浜辺が綺麗なんだって。安くしてくれると思つよ
」おつし、それ！」奈美香が大声で言つ。ビシッと怜奈の方を指差
した。

「それでいいんじゃない？」猪狩も賛成する。「それと、人を指差
すな」

「うん、じゃあ聞いてみる」指差された本人は気にしていないよう
だ。怜奈は何事もなく答える。

「よし、じゃあ、決まつたことだし飲みましょ！」奈美香がビール
ジョッキを高々と挙げた。

「今までも飲んでた」猪狩が揚げ足を取るようにボソッと言つ。
「つるさい！」奈美香は声を低くして猪狩を睨んだ。「あんたもつ
と飲みなさいよ！」彼女はビールを猪狩の前に突き出した。

一章 開始する学生の余暇と持続する彼らの猶予について

1

八月八日、奈美香はJR・S駅の改札前にいた。

三日前の飲み会の翌日、怜奈からメールがあり、伯父の伝手で部屋を取る事ができたという。海に行くのも泊まりに行くのも数年ぶりなので、この二日間で必要なものを買い今に至る。

奈美香が駅に着いたとき、既に猪狩がいた。彼は必ず一番早くに来る。ただ、時間に厳しいというわけでもない。常識の範囲内でさえあれば、他人が遅れても特に何も言わない。そして、基本的に時間を守るのは猪狩のみである。実は奈美香も三分の遅刻である。

ただ、この程度の遅刻をとやかくいう人間の方が珍しいだろう。それに、細かいことを気にする人間は嫌われる。そういうた概念があるために、時間を守らない人種というのが生まれるのだろうと奈美香は思った。

「いやあ、ごめんごめん」奈美香はとりあえず謝った。

「いや、べつに」猪狩の返事は素っ気ない。

彼は朝に弱い。朝に弱いといつのに時間は必ず守るのだから脱帽ものである。

といつても今は十時で、猪狩以外からすれば朝というわけではない。十時が朝だと言えば、全国に数千万人いるサラリーマンに申し訳が立たない。

彼の朝の状態はいつもこうである。奈美香と猪狩は小学校から同じなので、彼女はこれに慣れていた。

実は、昼になつても機嫌の悪さが直るだけで、無口なのは変わらない。そして、歳を重ねることに無口になつていつているようである。

この現象はいつたい何なのだろうか。彼の無愛想な顔を見ても答

えは浮かばず、彼女は周りを見渡した。怜奈が近づいてくるのが見えた。

「ごめん、遅れた！」彼女は笑っている。

これは彼女なりの謝罪の仕方であった。無垢なイメージの強い彼女だから許されるのだろう。おそらく自分が猪狩に向けて笑いながら謝罪したら、怒られてしまうだろうと奈美香は思った。

「いや、いいよ、おまえは。あいつのタチが悪い」猪狩が不機嫌そうに言つて腕を組んだ。

あいつとは藤井の事である。彼が一番時間にルーズである。

「ははは……」怜奈がフォローできずに苦笑いする。

藤井の時間のルーズ加減にはみなが不満を持つていた。

結局、そのあと藤井がやつてきたのは十時半を過ぎていて、さらにも悪いことに、彼は何も気に止めているようではなかつた。

「何のために待ち合わせの時間があるのかわかつたもんじゃない」

猪狩が藤井に聞こえない程度に呴いたのを奈美香は聞いた。

2

S駅から電車で数時間、ようやく目的地である観光地にたどり着いた。駅からバスに乗り換えて、さらに十五分ほどで海に着いた。バスを降りると潮の香りが鼻をついた。

「すごい……」奈美香が呴く。

奈美香は海の景色に圧倒されていた。澄んだ青色の水が太陽の光を受け乱反射している。非常に清々しいまぶしさだった。

だが、それ以上に圧倒されたのが観光客の多さだった。

「人多すぎ。場所ねえじやん」藤井が言つ。

台詞とは裏腹に表情は明るい。たしかに、人が多すぎるのは嫌だが、寂れている場所よりははるかに良いだろう。

「今日は土曜日だ。どうせ休みなんだから平日に来ればよかつたのに」猪狩がぶっきらぼうに言つ。猪狩のことだから、日程が決まつ

た時点ですつとやう思つてゐたのだろう。

「あ…… そうだね」 その言葉を聞いて怜奈が申し訳なさやうに言つた。

宿泊先まで用意してくれた怜奈が謝ることではないだろう。奈美香は猪狩の無神経さが癪に障つた。

「あんた、そういうこと平氣で言つんぢやないわよ！ セツかく怜奈が部屋とつてくれたのに、彼女は猪狩の頭をコシンと叩いた。

「いてつ…… 悪かつた」 猪狩は素直に反省したようだ。

「いいじやん、活氣がある場所の方が」と藤井。

「それにしてもよく部屋とれたわね」 奈美香は怜奈に尋ねた。

なにせ今は繁忙期の真つただ中である。いくら姪の頼みとはいへ、一日や一日前に予約が取れるとは思えなかつたのだ。

「えつとね、あれのせい」 怜奈が進行方向とは逆の方を指して言つ。三人が振り返つて見ると巨大なホテルが建つてゐた。そういうえばバスから見えていたなと奈美香は思つた。

「あれのせいで客が引いちやつたらしいんだよね。もともと小さいところなんだけど」

「なるほどな。ああいうのリゾートホテルつて言つんだろ？ ああ、嫌だ嫌だ。何でも大手がでしゃばつてさ。商店街と一緒に、小さことじろは潰されちゃうんだよ」 藤井がやれやれと肩をすくめて言つた。

「あんた、適当なこと言つてんぢやないわよ。あんたこの間、家の近くに大型スーパーができて凄い便利とか言つてたぢやない」

「え？ いや、その……」 藤井は口をパクパクさせながらも、言葉が出せないようであつた。

「ただ、怜奈に自分の株上げさせようたつて無駄よ」

「な？」 いや、ちょ、おい、助けてくれよ」 藤井は猪狩にしがみついた。

「別に、どっちにも、メリットデメリットはあるよ。ただ、規模が小さいと、そのメリットを生かすのが難しくはなるけど」

「はあ……。って、俺の弁護になつてなくね?」

「弁護してない」

怜奈はクスクスと笑っていた。奈美香もつられて笑つた。そのまま、海辺を左手にしばらく歩く。浜辺は端から端まで観光客で溢れているようだった。

「あ、ここよー」しばらくすると怜奈がそう言つて立ち止まつた。そこは、ホテルと言つよりはペンションに近いといえる小規模なものだつた。ただ、一階建てのその建物は年季こそ入つているが、いまだ健在という印象を受けた。おそらく、しっかりと手入れがなされているのだろう。

扉を開けるとジャラジャラと音が鳴つた。気になつて扉を見ると鈴が付いていた。電子音ではないところが好印象だつた。

ロビーはわりと広く、目の前にはカウンター、右手には大きなソファーがあり、くつろげるようになつてている。左手には扉があり、少し開いていた。中を見るかぎり食堂のように見える。

カウンターの横に通路があり、「ゆ」と書いた暖簾がかかつている。どちらかといえば洋風のこのホテルには似つかわしくなく滑稽に見えた。カウンターの奥に扉があり、事務室になつてているようだ。鈴に反応したらしく、ちょうどそこから男が出てきた。こちらの姿をみとめると笑顔になつて歩み寄つてくきた。

「久しぶり、怜奈ちゃん」

「ここにちは伯父さん。今日はありがとうございます」怜奈が礼儀正しくお辞儀をする。

どうやらオーナーのようである。白髪が少し混じつた少し小太りの男だつた。

「いやいや、こっちの方こそ。向こうにホテルがてきてから結構厳しくてね……」オーナーは苦笑いする。そして猪狩たち三人の方を見て自己紹介した。

「オーナーの林です。どうぞよろしく」

三人もそれぞれ挨拶をした。

「あの、伯母さんは？」

「元気だよ。ただ、今は手が離せなさそうだけじね」

「そうですか。じゃあ、あとでまた挨拶に来ますね」

「ありがとう。まず、荷物を置いてくるといいよ。君たちの部屋は二階だから。はい、鍵」四人はそれぞれ鍵を受け取った。

彼らは部屋へと向かう。ロビーの右に通路があり、通路の手前左側に階段、その奥には左右に三部屋ずつ、計六部屋あった。その階段を上つて二階へと向かつた。

二階には左に四部屋、右に四部屋。階段を挟んで対称だった。階段の目の前にはトイレがあった。

四人の部屋は左側の四部屋で猪狩が左角、階段側の奥の一〇五号室、藤井はその手前の二〇三号室。その向かいが怜奈の部屋で二〇八号室、右角が奈美香の一〇〇号室である。四と九は無いようだつた。

「さて、もう十一時だけどどうする？」藤井が聞いた。

「お昼食べて、海！」奈美香は元気良く答えた。

なにせ、今回のメインイベントなのだ。これなくして、何をしごここまで来たのかという具合である。

「OK。じゃあどうかで飯食つて、そのまま海行くって事で。準備して行こうぜ」藤井がそう言つて自分の部屋に入つていった。

猪狩は部屋に入つて荷物を降ろした。部屋の中にはベッドと椅子、テーブルがありテレビがついている。窓際にはソファもあった。一般的という言葉が似合う部屋だった。高校の修学旅行で行つたホテルと構造はほとんど同じだつた。ただ、こちらの方がグレードは低いようであつた。ホテルは様々な人間のニーズに答えるために汎用性が求められるので、どこも似たり寄つたりになるのだろう。違いがあるとすれば和式か洋式かの差くらいであろう。

一泊なのでクロゼットに着替えを入れる必要はないだろうと考へて、バッグから出さずにそのままにしておいた。

海に入るには面倒だから海パンは置いていこうかと思つたが、さすがに文句を言われるのは明らかなので一応持つていくことにした。部屋を出ると三人はすでに準備を済ましていた。鍵を閉めて四人で歩き出す。奈美香はかなりハイテンションである。早く海に行きたいのだろう、駆け足である。

「ガキくさ……」猪狩は聞こえないようにつぶやいた。

怜奈には聞こえたらしく、こちらを見て微笑んだ。藤井には聞こえなかつたようだ。なぜなら彼も異様にハイテンションである。この四人組は奈美香と藤井がアウトドア派、猪狩と怜奈がインドア派とはつきり別れている。

「わっ」

先頭を小走りに進んでいた奈美香が階段のところで男とぶつかつた。奈美香が尻もちをつく。藤井にもぶつかりそうになつて、彼がよろけた。

「いたた……」

「おつと、ごめんよ。大丈夫かい？」男は奈美香に手を差し伸べる。男は二十代後半くらいだろうか、すらつとした体型で整つた顔立ちだった。おそらく女性受けする顔というはこういつた顔なのだろう。

「いえ、大丈夫です。ありがとうございます」奈美香が男の手に引かれて立ち上がる。手を取らなくとも立てるのに、男の手を取つたのはわざとだな、と猪狩は思つた。

「そう。ごめんね。海にでも行くのかい？ 気をつけて」そう言つと男は右に曲がり、右手前、つまり一〇一号室に入つて行つた。

「ねえ、あの人カッコ良くない？」奈美香が聞いてきた。

「知らないよ。そんなの」猪狩は奈美香の問いに答えずに、先に進んだ。

階段で三十代くらいの男とすれ違った。ロビーには二十代くらいの女性がいたし、玄関では中年の夫婦とすれ違った。巨大ホテルの影響で客が少ないと言っていたが、それでもそれなりにはやつているようだ。

どこで昼食を食べるかという話になり、相談の結果、適当に海の家を見つけて、という事になつた。どこも混んでいたが、歩いて三分ほどでちょうど四人分の席が空いた店を見つけた。四人はそろつて焼きそばを注文した。

昼食を終えると今日のメインイベント、海である。着替えると奈美香と藤井が一目散に海へ飛び込んでいった。

さながら小学生だと猪狩は思つたが、怜奈も嬉しそうに飛び込んでいつたので、こういうものなのだと思う事にした。否、彼らを見る前から、こういうものなのだろうということはわかつていた。

ただ、じつはこのことに関して自分が他人と違う感性を持つているだけだ。その事を猪狩は自覚していた。

ちなみに猪狩は海が嫌いではない。海にさえ入らなければ、であるが。泳げないわけではない。むしろ、小学校のころは水泳教室に通つていたくらいで、泳ぐのは得意だ。

ただ、泳ぐという行為に楽しみを見いだせないだけである。正確にいえば泳ぐだけではないし、泳ぐことが海水浴のメインではないように思える。

とりあえず、適当に砂場に腰を下ろして、三人を眺めていた。
「海、入らないの？」しばらくして、怜奈が海から上がつて話しかけてきた。

「ああ、疲れるから。あいつらが入れつて言つまでは」

「猪狩君らしいね」怜奈は微笑む。

「康平！… あんたもこつち来なさい…」奈美香が海から叫んで

いる。

「さつそく呼ばれたね」怜奈がもう一度微笑む。「行こつか」

「うん」猪狩が立ち上がる。「やれやれ」

それから、バナナボートを借りたり、せらじはビーチバレーのポートまで借りたりして、三人は海を満喫したようだ。猪狩もほぼ無理やり付き合わされた構図にはなつたが、それでもそれなりには楽しめた。

四時近くになると、さすがに遊びつかれて、さうには海の水も冷たくなつてきたのでホテルに帰ることになった。

途中のコンビニで酒を買おうという話がでた。といつてもホテルは浜辺からすぐであるのに対してもコンビニは一度大きい道路に出なくてはいけないので遠回りではあつた。

ホテルに着いたのは五時少し前。夕食は七時からなのでまだ時間がある。四人はとりあえず自分の部屋に戻つた。

猪狩はベッドにうつ伏せになつた。しばらくそうして黙つていた。何もする事がないので本でも読もうかと考える。どうやら、こういった行事に本を持つてくることも本来は邪道らしい。ただ、人が勝手に決めた邪道など、どうでもよかつたので持つてきていた。ドアをノックする音がする。

「康平、入るわよ」奈美香の声だ。

「どうした?」

「暇だから藤井の部屋でゲームしないかだつて」

「別にいいよ。行こ」

猪狩は立ち上がつた。

猪狩は怜奈が差し出した一枚のカードを見比べた。右のカードに手をかけて怜奈の表情を伺う。左のカードに手をかけて変化を探る。猪狩は思わず舌打ちした。

怜奈は見事なポーカーフェイスだった。これが藤井ならば、おそらく表情から何らかの情報は読み取れるのだが、玲奈と奈美香だとそうはいかず、運に頼らざるを得ない。

これだから女性は怖い、そう思つた。

猪狩は迷つて右のカードを引き抜いた。瞬時にため息が出た。人の不幸を喜ぶような笑みの死神の絵柄だった。

「しゃつ」怜奈がガツツポーズをする。

一枚のカードをシャツフルして怜奈の前に提示する。

今度は怜奈が、猪狩がしたように左右のカードに手をかけて感情を読み取ろうとしていた。次第に怜奈の表情が曇る。猪狩もポーカーフェイスには自信があった。

結局、意を決したのか、一枚のカードを引き抜いた。

その瞬間、怜奈が歎声を上げた。

「やつた！」

「昔からこれは嫌いなんだ」猪狩はつい不満を漏らした。「運の要素が強すぎる」

「あんた、昔から運悪かったからね」奈美香が自慢げに言った。

猪狩は何か言い返したかったが言葉が出てこなかつた。とりあえず、残つたジョーカーを無造作に放り投げた。

藤井の部屋では、 Baba 抜きや大富豪をしていた。圧倒的に奈美香が強かつた。他の三人は大富豪では横一線だったが、 Baba 抜きでは猪狩が圧倒的に弱かつた。

そのあとも、何度もゲームを続け、あつという間に時間は過ぎてしまった。結局、猪狩が巻き返すことはできなかつた。

別に修学旅行ではないので時間きつちりに行く必要もないが、トルンプも飽きてきたということで食堂へ向かう事にした。

食堂は一階ロビーの左側にある。食堂に入ると何人かの客はすでに来ていて、思い思いの席についていた。

「あ、あの人」奈美香が指を差して言った。

彼女が指した方向を見ると、昼間彼女とぶつかつた男が座つていた。奈美香が格好良いと言つていた男である。

彼はこちらに気づいたようでこちらに向かつて微笑んだ。軽く手も振つてゐる。奈美香はそちらに向かつていつた。

「あの、ここ、いいですか？」奈美香は笑顔で聞いた。

「うん、いいよ。君たち大学生？」

「はい、矢式奈美香つていいます。〇大です」席に着きながら奈美香が答える。彼女は男の向かいの席に座つた。

「へえ、〇大か。頭いいね。僕は真崎和哉つていうから。よろしく矢式さん」

真崎に対し、奈美香は笑顔で応対している。だが、それは作つてゐる笑顔だと猪狩はすぐにわかつた。猪狩の両親にもそうだし、彼女は基本的に目上の人間には猫を被るのだ。

三人も自己紹介をして、そのあとはもつぱら奈美香が話していた。よほど真崎のことが気に入つたらしい。確かに、見た目は良いし、話しているのを聞く限り、性格も良さそうだ。

「真崎さんつて何のお仕事をしているんですか？」

「うーん、まあ一応探偵やつてるけど……」真崎が歯切れ悪く言う。

猪狩は話半分で周りを見ながら聞いていた。なので、探偵という聞きなれない職業（一部の読書家は聞きなれているかも知れないが、職業としてはかなり異質であるはずだ）に反応した客が何人かいたのが観察できた。特に、テーブルの向こうで食事をしている女、今日出かけるときにロビーで見た女だが、彼女が興味深そうにこちら

を見ているように思えた。

「え！？ すごいですね。やつぱり殺人事件とか解いちやうんですか？」奈美香は目を輝かせている。

奈美香はミステリーをよく読む。それを猪狩は知っていたので、奈美香の興奮ぶりは納得できた。だが、理解はできなかつた。

昼間に階段で会つた男も興味深そうにこちらを見ている。これだけ大声で探偵だの殺人だの言つていれば注目を集めてしまつるのは無理もないだろう。

「いや、そう思うでしょ？ だからあんまり人に言いたくないんだよね」真崎は苦笑する。「そういうのは小説の中のお話や。警察が探偵を頼る事なんてないよ。というよりは、法律がそういうふうに作られていなからね。本来の仕事は素行調査とか浮氣調査とか、あと人探しとか。地道な調査が主な仕事だよ。まあ、だいたいが浮気調査なんだけど」

「へえ、そうなんですか……」奈美香は少しがつかりしたようで、肩を落とした。

2

食事のあとは風呂に入つた。小さなホテルだが、温泉が付いていなかなか立派だつた。

猪狩と藤井が湯船に入つていると、やや遠くで真崎と男が話しているのが聞こえた。たしか、階段ですれ違つたなど猪狩は思つた。つまり、食事の時に興味深そうに話を聞いていた男である。

「あんた、探偵なんだつて？」男が聞く。

「はい、そうですけど……えつと」

「ああ、悪い悪い。俺はフリーのライターをやつてる尾崎つていうんだ。最近あまりいいネタが無くつてさ」

「なるほど、で、僕が探偵だつて聞いて記事になると思つたんですね？ でも本当に何もないですよ」

「いや、そんなことはないだろ？」「いや、まあ」

真崎は一度言葉を切る。

「死体に遭遇した事は何回ありますよ」

「ほう……」

そのあとの会話は猪狩には聞くに堪えなかつた。猪狩は風呂から上がることにした。藤井は少し興味深そうにしていたが、彼もすぐ上がつてきた。

「わあ、グロ……」藤井が手を掃う仕草で言つた。

「まあ、あとでもつと凄い話になるんだろうな」

「まさか、あれ以上は『めんだぜ』

「とりあえず、前隠せ」

「なんだよ。みみつちいな。男なら堂々としろよ」

藤井が猪狩のタオルを無理やり奪おうとするので、軽く頭を殴つて黙らせた。

着替えを済まし更衣室から出ると、ちょうど奈美香と怜奈も女湯

から出てきた。もう一人大学生くらいの女性が一緒だつた。

「あ、康平。えつとねこの娘、中井夏美ちゃんつていうの」奈美香が紹介する。

「よろしくー」中井はにっこりと微笑んだ。

「どうも」猪狩はそれだけ言つた。それ以外に言葉が思いつかなかつた。

「よろしく。えつと、一人で来たの？」藤井が猪狩を押しのけ前に出て聞いた。

目が輝いているが、誰が見ても下心丸出しながらわかる。

「うーんと、来たのは一人なんだけど、彼氏がここでバイトしてるから

猪狩は藤井が一瞬うなだれたのを見逃さなかつた。

それにも従業員がいたのかと、そちらの方に興味を持つた。よく考えれば、いくら小さいとはいえ、オーナー一人で何とかなる

ものではない。もちろん奥さんもいるだらうし、子供がいるかは知らないがアルバイトの一人や二人いてもおかしくないと納得した。ただ、家族経営というのはよくあることだつたし、逆にアルバイトを雇うのはコスト面ではどうなのだらうかと、猪狩は少し考えた。

「じゃあ、後でね」そう言って中井は奈美香と怜奈に手を振り、階段のすぐ隣の一〇一号室に入つていった。

「さて、これからどうする?」先ほどのショックから立ち直つたのだろうか、藤井両手を挙げて伸びをしながらが聞く。

「え? 飲むんぢやないの?」と奈美香。さも当然のように言った。

「さつさ買つたお酒、誰のところにしまつたつけ?」怜奈が首を傾げながら言つ。

「あ、俺の部屋だ。じゃあ、行くか」藤井が答えた。

藤井が先頭に立つて階段を上ろうとしたとき、どこからかベルのような音が聞こえてきた。

「何? 何の音?」怜奈がびっくりした様子で周囲を見渡した。

猪狩は耳を澄ました。どうやら左奥の部屋、一〇二号室から聞こえるようだ。

「あの部屋かな?」猪狩は指を差して言つた。

「あれ、何の音かな?」

四人以外の声が聞こえてきて、全員が振り返つた。そこには風呂から上がつた真崎と尾崎がいた。話しかけてきたのは真崎の方である。尾崎は顔をしかめている。

「うるさいな」尾崎が部屋の方へと歩いていく。「おい、うるさいぞ!」

扉をノックするが反応がない。

「いないのかな?」怜奈が首をかしげる。「誰の部屋かな?」

「鍵はかかってます?」猪狩は聞いた。

「掛かってるぞ」尾崎はドアノブを回す仕草をしたが、ガチャガチャと音を立てるだけで、それは動かなかつた。

「オーナーに言つて鍵を開けてもらいましょうか。人の部屋に入る

のは気が引けるけど、これじゃあ、うるさすぎる」真崎が提案した。

「あ、私行つてきます」いち早く反応した奈美香が走つていぐ。

「なんか、目覚まし時計みたいだな、これ」藤井が独り言のよう言つた。

猪狩もそう思つた。最近の電子音のものではなくて、昔ながらの鐘を打つような音だつた。

「さあ、部屋には備え付けられてなかつたと思つけど」猪狩は答えたが、本当に独り言だつたらしく、反応は返つてこなかつた。

ロビーからオーナーと奈美香が歩いてくる。

「うーん、お客さんの部屋に勝手に入つたら駄目なんですけどね…

…」オーナーは渋い顔をする。オーナーからするとプライバシー管理の問題があるのだろう。開けることに積極的ではないようだ。

「そんなこと言つてもこれじゃあ迷惑だろ」尾崎はかなり気が立つてゐるようだ。

「秋山様？ ディレクション？」

鍵を開ける代わりに、ドアを強くノックして、呼びかけるが反応はない。

「明けた方がいいんじゃないですか？ もし、中にいなければ、これを止めればいいですし、仮に中にいるんだつたら、それはそれで深刻な事態じゃないですか」真崎が訴える。

「仕方ないですね」オーナーが扉に近づきマスターキーを差し込んだ。キーを回し、カチッという音が鳴つた。

オーナーが扉を開けた。

そして、誰もが絶句した。

部屋に入ると奈美香の視界に真つ先に入つてくるものがあった。

女性がうつ伏せに倒れているのだ。

その背中には刃物が刺さり、血がにじみ出でている。二つの間にか

音は止んでいた。

怜奈が短い悲鳴を上げた。そして、目をそらしロビーの方へ走つていった。

奈美香は一瞬も目を逸らさなかつた。どうしてだろうか、足を一步踏み出した。

「おい！？」誰かが驚いて叫んでいるようだ。おそらく猪狩だろう。しかし、彼女は足を止めない。一步、また一步。

なぜ、歩いているか自分でもわからなかつた。ただ、何かを確認したかつた。死んでいる事か、あるいは死んでいない事か。自分ではどうしようもないことはわかつていていた。ただ、どうしようもなく確かめたかつた。これは單なる好奇心だろうか。

「入らないで！！」真崎が叫び、奈美香は無理やり引き止められた。そこで奈美香は我に返つて冷静になつた。真崎を見上げると、彼は今までになく真剣な表情をしていた。

「まだ生きているかも知れないけど、現場は荒らさない方がいいだろ？」「うう

彼はそう言つたが、誰も生きているとは思つていらないだろう。刃物は引き抜かれていないので、血が飛び散つてゐるわけではないが、傷口からにじみ出でている血を見れば、素人目に見ても明らかだつた。真崎が倒れている女性の方へ向かう。しゃがみこんで何かをしている。脈を測つてゐるのだろう、手馴れている。

「オーナー、警察を呼んでください。救急車は、そうですね、呼んでください。でも、無理でしょ？」真崎は首を横に振つた。

オーナーは天を仰いだ後、ロビーへと歩いていく。死者への冥福を祈つたようにも、自分のホテルで死者が出たことでの落胆にも見えた。

真崎がテーブルへと向かう。何かに気が付いたようだ。

ポケットからハンカチを取り出した。それはたたまれてはおらず、くしゃくしゃになつて入つていていたようだ。意外にズボラなところもあるのだなと奈美香は思った。

「……馬鹿じやない、私」

「こんな時に一体何を考えているのだと、思考をすぐに元に戻した。

真崎はハンカチでテーブルのあるものを掴み、振り向き、それを入り口に立っている者たちに見せて言った。

「鍵だ」

数十分後、ホテルに警察の第一陣が到着した。そして、一時間もたつたころには警察関係者で埋め尽くされた。被害者の部屋はもちろん、ロビーまで警官だらけとなつた。

ホテルの客は、ロビーで待機するように言われている。四人はソファーに腰掛けてじつと待つていた。

おそらく、事情聴取というものがこのあと行われるのだろう。どのようなものだろうかと、奈美香は想像を巡らした。

「殺された女人、誰？」藤井が誰に向かってでもなく言つた。

「さあ、ホテルの中では何回か見たけど」猪狩が答える。

「私も知らない」奈美香は怜奈の方を見た。

彼女は気が動転しているのだろうか、藤井の問いにも反応せず、ずっと俯いている。大丈夫だろうかと心配になつた。

二人の視線も彼女に集まる。彼らも不安げに怜奈を見ていた。少し休ませた方が良いかもしれないと奈美香は思い始めた。

「なあ、休ませた方が良くないか？」同じことを思つたらしく、猪狩が藤井に聞いた。

「ああ、聞いてくる」藤井は近くの警官の方へ歩いていった。

こういった行動をさせるのには藤井は適任である。彼はすぐに戻つてきた。

「部屋で休んでいいってさ。あとで話を聞きに来るつて」

「そう。怜奈、大丈夫？」奈美香は怜奈の顔を覗き込むように言った。

「うん」怜奈は小さな声で答えた。

決して大丈夫には見えない。奈美香は怜奈に肩を貸そうとした。

「大丈夫。一人で歩けるよ……」

怜奈は立つときこそ少しふらついたものの、危なげなく歩いていつた。それを見て奈美香は一息ついた。

さて、どうしたものか。

奈美香は、先ほど起こつた不可解な現象について考えていた。しかし、思考がまとまらない。

「こういった事態は小説の中だけだと思っていた。だが、実際に起ってしまったのだ。そして、実際に起こつてみると異常なほどに緊張感を感じる。人の死という現実が自分の身体を縛り付けている。頭もパニックに陥つて、正常な判断を下すのが難しい。この中で平気で推理を展開できる名探偵たちは、やはり小説の中の人物なのだと改めて思った。

現実に名探偵はいない。警察はいる。これは警察の仕事なのだ。そして、名探偵がいなくとも仕事を十分にこなせる人材がそろつているはずなのである。

しかし、それでも気になるものは気になるのだ。深呼吸をして落ち着こうとする。

四人は怜奈の部屋に着いた。

部屋に入ると怜奈はベッドの端まで歩いていった。彼女はそこに腰かけたが、横にはならなかつた。奈美香がコップに水を注いで怜奈に渡してやると、怜奈はそれを少しずつ飲んだ。

「ありがと、奈美香」怜奈は奈美香に微笑む。

若干の無理があるように思えたが、少し良くなつたようだ。

奈美香は部屋に備え付けてある椅子に座つた。

「無理するなよ」藤井が心配そうに声をかける。

彼は座る場所を求めて窓際まで行つてソファに座つた。

「寝てた方がいい」座る場所がなく、入り口付近の壁にもたれていた猪狩が言った。

そういわれて彼女は少し迷つたようだが、横になつた。

その時ドアがノックされた。猪狩が一番近かつたので彼がドアを開けた。真崎だった。

「やあ。新川さん、大丈夫かい？」

「ええ、ありがとうございます」怜奈は上半身だけを起こした。

「無理しないでよ。えっとね、今、下の一〇五号室で事情聴取をやつているんだ。あとは君たちだけだよ。そのうち警察が呼びに来ると思うけど。……まあ、新川さんは無理しなくてもいいんじゃないかな。じゃあ、お大事にね」そう言って微笑むと真崎は部屋から出て行つた。

「真崎さんって良い人ね。こういう気遣いができる人つていいわあ」奈美香はわざとらしく猪狩の方を見て言つた。

真崎の対応は嬉しかつた。自分に向けられたものではないが、好意的な対応だ。猪狩の方を見て言つたのは彼の無愛想に対する嫌味だつた。だが、猪狩は何の反応も示さなかつた。少し腹立たしかつた。

彼は少し無愛想すぎる。「少し」と「すぎる」が同時に存在する文章はいさか適切でないようと思えるが、彼を表すのにはあながち間違いではない。彼は決して、不親切だつたり、性格が悪いわけではないのだ。ただ、「おとなしい」を通り越して「寡黙」だし、その分、勘違いされがちだ。

（それさえ直つてくれさえすればいいのに……）

だが、直つたところで、「誰が」「どう」「良いのだろうか。なぜそう考えたのだろうか。

結局、奈美香は考えるのを止めた。

しばらくすると警官がやつてきた。どなたからでも、といふことで猪狩が最初に行く事になつた。

猪狩が一〇五号室に入ると、警官が一人いた。一人は三十代くらいで背が高い。がつちりとした体格で、もう一人は五十代くらいだろうか。若干白髪混じりで小柄だ。

一人とも椅子に座つていてる。部屋に椅子はひとつしかないのと、どこからか持つて来たのだろう。さすがにソファで事情聴取をするのもおかしいし、納得できた。

「すいませんね、お手数をおかけします。道警の大竹と申します」

若い方の男が愛想よく言った。

「どうも」猪狩はそれだけ言った。こいつは「仕事の顔」が猪狩は苦手だった。

「どうぞおかげになつてください」猪狩は言われた通りに椅子に座つた。

「ええと、まず、殺された被害者と面識はありましたか?」大竹が言つた。

「どうやら若い大竹の方が話を進めるらしい。

「いえ、ないと思います」

「思います、と言つと?」

「顔を見てないんで。名前も顔も知りません」

「ああ、失礼しました。」そう言つと大竹はテーブルの上のファイルから写真を取り出す。「こちらです。秋山美冬さんというのですが」

猪狩は写真を見た。若い女性の顔が写つていて、ホテルに来てから何度も見た顔だ。海に行くときにロビーで見かけたし、夕食のときにもいた。

「いえ、ここでは何度も見ましたけど話もしていません」

「そうですか。では、事件が発覚したときの事を教えていただけますか? 他の方の話だとあなたもいたそうですが」

「えつと、風呂から上がって部屋に戻ろうとしたら、目覚まし時計みたいな音が聞こえたんです。で、たしか尾崎さんでしたっけ? 記者の人が扉をノックしたんですけど反応がなくて。うるさいから鍵を開けて中の様子を見ようつて事になつて、オーナーが鍵を持つてきました。あの音つて何だったんですか?」

「あなたの言うとおり、目覚まし時計ですね。隠されていました。

いろいろと細工がされているようで、今調べています……」大竹は言葉を切った。

喋りすぎたということなのか、もう一人の刑事に睨まれている。細工がされていたということは、その時計が密室に必要だったとう事だろうか。

「鍵を開けたのはオーナーでしたか？」大竹は咳払いをして質問を再開した。

「え？ たしかそうでしたけど」

「その前に鍵がかかっているのを確認しましたか？」

「いえ……」

なるほど、警察は本当はあの部屋が密室ではなかつたと考えているのだろう。しかし、たしか部屋を空けようとしたのは尾崎だつたはずだ。一人が共犯でないかぎりそれはない。そもそも、本当に密室だつたのだろうか。猪狩は自分がいつもより積極的な思考になつてていることに気づいた。

「窓の鍵つてかかっていましたか？」猪狩は聞いてみた。

「……かかっていましたよ」大竹は少し渋い顔をした。

あまりいろいろ質問するなどいふことだらうか。年配の刑事の顔色を窺つている。

だが、猪狩にはまだ一つ気になることがあつた。

「あの、部屋に入つた時には音が止んでいたんです」

「ああ、それですね。普通の目覚まし時計と同じみたいですよ。時間が経つと止まります。ただ、しばらくするとまた鳴るようになつています」この質問にはためらいなく答えてくれた。

「ああ、なるほど」

細工がされているといふので気になつたが、どうやら音が止んだこと自体には関係がないようだ。肩すかしをくらつてしまつた。「では最後に今日の行動について教えて下さい。夕方以降でいいですよ。」

「えつと、たしか海から帰つてきて七時まで友達と四人でトランプ

をしていました。それから夕食を食べて……七時半過ぎくらいから八時半くらいまでは自分の部屋にいました。それから風呂に入つて、出てきたところで終わりです」聞かれている事を答えているだけだが、いつもより饒舌だと自己分析する。

大竹はメモを取つてはいる。年配の刑事はすつと考へ込んだ表情だ。「もういいですよ。ありがとうございます」

3

怜奈の顔色はだいぶん良くなつたようだ。自分もさつきより落ち着いてきた。奈美香はそう思い、ずっと思つてはいた事を口にしてみた。

「誰がやつたのかしら?」

「え?」一人は驚いたようだ。

「ああ、そういう話になるの?」藤井は苦笑とする。

「私もちよつと気になる……」

怜奈も驚きはしたようだが、興味をそそられたようである。やはり、女子の方が強い世の中になつたのだらうかと考へる。ちよつど猪狩が入つてきた。

「次、誰が行く?」猪狩が聞いてきた。

「じゃ、俺が」藤井が立ち上がり、部屋から出て行つた。

「誰がやつたと思う?」奈美香は同じことを猪狩に尋ねた。

「さあ、それよりどうやつてやつたか気になる」そう言いながら猪狩は窓際まで歩いてソファに腰かけた。

「あ、たしかに」

「どうしたこと?」ベッドの上で怜奈が首を傾げた。

彼女は鍵を見ていなことを奈美香は思い出した。

「ああ、テーブルの上に鍵が置いてあつたのよ」奈美香が説明する。

「……密室?」

彼女はしばらく考えてから言つた。彼女にとつては馴染みのない

言葉で、すぐには言葉が出てこなかつたのだろう。彼女は奈美香と違つてミステリー小説を読まない。

「やつこつ」と

「窓も？」

「あ」

「あ」それはすっかり忘れていた。全く見ていなかつた。

「かけてあつたよ」猪狩が答える。

「本当に？」奈美香は猪狩に尋ねる。

「知らない。警察が言つていただけだから」猪狩が窓を見ながら言った。

「本当に密室ね」奈美香がつぶやく。

奈美香も窓際まで歩いて、窓のカギを見た。一般的な三日月状の円盤を回転させるタイプだった。おそらくどの部屋でも同じだろう。

「そうでもないだろ。鍵が一つあればいいんだから」

「あ、そうか」

少し思考が偏つていると奈美香は感じ、落ち着くために深呼吸した。

「でも普通は部屋の鍵つて一つじゃない？ あとで伯父さんに聞いてみるけど」

たしかにホテルの鍵が二つ以上あるとは聞いた事がない。あとはマスターキーだけだろう。

「じゃあ、可能性は二つね。みんなの目を盗んでカウンターからマスターキーを盗んだか、外から何らかの方法で窓かドアの鍵を閉めたか」

「もう一つ、あの時、まだ犯人が中にいた」

「ありえる？」怜奈が首を傾げる。

「さあ、ベッドの下とか、クロゼットの中とか。でも可能性は低いよ」

「なんで？」

「警察が来るまで俺がずっと見てた。ロビーからだけど」

「うーん。じゃあ、やつぱりキーを盗んだか、外から鍵をかけたか

ね。でも、カウンターからキーを盗むのってかなりハイリスクじゃない？ 戻さなきやいけないし」奈美香は腕を組んで言った。

「こんなところで殺すこと自体がハイリスクだ」猪狩はそう言いつと立ち上がった。

彼はそのまま部屋の出口へと向かっていく。

「ちょっと、どこ行くのよ？」

「部屋。なんか馬鹿馬鹿しくなってきた。だつて警察の仕事だろ、これ」そのまま部屋を出て行った。

「つまんない男……」奈美香は猪狩の後ろ姿を睨みながら呟いた。

「あれ、康平は？」入れ替わりで藤井が戻ってきた。

「部屋に戻っちゃった」怜奈が説明する。「さつきまで、密室の話で盛り上がつてたんだけど」

「なんだ、俺だけ仲間はずれ？」

4

奈美香は警察の事情聴取を終えると一度部屋に戻つた。わかつたことは少ない。殺されたのは秋山美冬という女性で〇一といふことだけだつた。

一人で考えに耽つていたが、どうにも落ち着いていられずに、部屋を出た。

階段を下りてすぐ左の部屋、一〇一号室の扉をノックした。しばらくの間があり、中井夏美が顔を出す。

「やつほ」奈美香は笑顔で小さく手を振つた。

「ああ、奈美香ちゃん。入つて入つて」中井も笑顔で返す。

奈美香と中井は今日知り合つたばかりである。中井はH大の一年生である。〇大とH大は決して近くはないが、同じ地域にある。電車なら一時間もかかるない。離れた土地で不思議な縁を感じた。先に話しかけてきたのは中井の方で、話していくうちに互いにミステリー好きという事がわかつて、意気投合したという経緯である。

「大変な事になつたね」中井にあてがわれた椅子に座ると奈美香は話を切り出した。中井自身はベッドの端に腰かけている。

「うーん、でも私見てないからなあ。奈美香ちゃん、見たんでしょう？」

「うん、ちょっときついわね」奈美香は苦笑にする。思い出すと寒気がしてきた。

「私駄目だわあ、きつと。」いつこののは本の中だけにしてよ、って感じ」

彼女は勢いよくベッドに倒れこんだ。バフッヒベッドが音を立てた。

「事件のとき、何してたの？」奈美香は思い切つて聞いてみるとした。実はこれを確認しに来たのだ。中井ならば嫌悪感を抱かずには答えてくれるだろ？

「なに、アリバイ確認？ うわあ、事件解決する気なんだあ？」中井はすぐさま反応して起き上ると、田を丸くした。「いいよいよ。どうせ私やってないから。えつとね……いつ？」

「夕食のときはいた気がするのよね、殺された女の人。だから、その後」

「えつとね」中井の目線は天井を向いている。思い出そうとしているようだ。「しばらくは、食堂にいたかな？ 貴裕としばらく話して、仕事があるからって、彼、厨房に引っ込んで行っちゃつたから、部屋に戻つて。何時頃だつたかなあ？ 覚えてないや。そのあとすぐお風呂に行つたよ」

貴裕とはここで働いている中井の彼氏の事だつと奈美香は推測した。

「ふーん、じゃあ、彼には一部アリバイがあるのね。オーナーも一緒かしら？ その辺は怜奈が聞いているかしら」

「がんばつてね」

「何の得にもならないけどね。好奇心つて嫌だわ。わかってるの止められないもの」

怜奈はカウンターの奥の部屋にいた。事務室のよつなところである。オーナーの林は、机に向かってはいるが、ただ、頭を抱えるばかりで、特に作業は行っていなかつた。

伯母の凜子も椅子に座つてそわそわしている。

その奥では若い男が部屋の隅の長ソファに座つてペットボトルのお茶を飲んでいた。

「参つたよ。ただでさえ経営が厳しいのに、殺人事件があつたなんて広まつたらどうしようもないよ」林はため息をつく。苦笑いすらできないようだ。

「伯父さん、大変ですね……」

「警察にもいろいろ聞かれるし、冗談じゃないなあ。アリバイとか聞かれるしね」

怜奈はしめた、と思つた。一番聞きづらかったことを自ら話してくれた。もつとも、怜奈は自分の伯父が人を殺したとは全く思つていない。

「ずつとここで仕事してたからさ。誰も見てないんだよね。あ、高石君が何度か来たつけ？」

林は椅子に座つたまま首だけ後ろを向いて高石に同意を求めた。怜奈は彼が中井の彼氏だらうと思つた。

「はい」とだけ高石は答えた。

「母さんは、どうだつけ？」

「それこそ高石君と夕食の後片付けでしたよ。ねえ？」

「はい」高石は再びそれだけ答えた。おとなしい性格なかもしれない。

「もう、早く犯人を捕まえて欲しいよ。でないと商売あがつたりだよ」

「でも、どうやって鍵をかけたんですかね？ それがわからないと警察も動けませんよね」

「ああ？ でも、小説とかでよくあるじゃないか」

「マスターキーとか、盗られた形跡ありません？」

「ないよ。ほら、それ」

林が壁を指差した。金庫のよつなものが壁に取り付けられており、番号式の鍵がつけられていた。あの中に鍵が入っているよつだ。

「あの番号、俺しか知らないから」

6

猪狩は自分の部屋に戻るところだつた。階段を上つている途中で、話し声が聞こえてきて足を止めた。

「で、探偵としてはどう考へていいわけだい？」 真崎の部屋の前で尾崎が真崎に話しかけている。

尾崎は腕を組んで、一いや一いやと、何やら楽しそうに話しているが、真崎の方は、頭をかきながら苦笑している。

盗み聞きするのもどうかと思ったが、そのまま聞くことにした。何か事件について聞けるのではないかという期待があった。事件があつてから確実に思考が変化している。だが、理由はわからなかつた。

「なにも。僕の仕事じゃないですよ。」 真崎は素つ気ないが、微笑んでいるようにも見えた。

「そんなこと言わずにさあ」

「何を聞きたいんですか？」 真崎はため息をついて苦笑した。

「もちろん、犯人は誰か？」 尾崎は指を立てて言った。『でも情報が少ないわな。とりあえず、密室のトリックかな？』

「さあ？ でも方法はいくらでもありますよ。誰にでもできます。僕にもアリバイはないですしね。あなたにもないでしょ？』

「まあな、自分の部屋で仕事をしていただからな」

「とにかく情報が少なすぎます。そして情報が増える」ともないで
しょう。僕は警察関係者じゃない。むしろ容疑者だ」
「まあ、やうだな」尾崎は舌打ちした。「悪かつたな、時間食わせ
て」

そして彼は自分の部屋に戻りつとする。

「そういえば」真崎がそう言い、尾崎が足を止めた。

「中年の夫婦、見ませんね」真崎が呟いた。

すでに十一時近かつた。買つてきた酒も無駄になつてしまつた。もし、何事もなく飲んでいたらまだ起きていただろうが、そんな気分ではなく、みんな寝てしまつたようだ。しかし、奈美香は密室の謎が気になり、目が冴えていた。色々な可能性がある。けれども、どれも弱い。猪狩なら何か思いついているだろうかと思つた。彼は昔から観察力や閃きが良かつた。誰も気がつかないところに気がついたり、疑問を感じたりしていた。その度に「なんで、そんなこと気にするの?」とか「別にどうでもいいじゃん」などとまわり言われていたから自然と喋らない事を覚えたのかもしれない。

そう、昔はもっと喋る少年だったのだ。

彼のところに行こうか考えたが、もう寝ているだろうし、あまり興味がなさそうだったので無駄だな。どちらにせよ今日はもう遅い。明日にしようと思つたとき、ふと真崎の事を思いついた。

「真崎さんなら、何か思いついているかも……」

まだ起きているだろうか、少し話を聞いてみたいと思つた。そう決心して、奈美香は部屋を出た。

真崎の部屋は一〇一号室だ。寝ていても起こしてしまわなにように軽くノックするが反応はなかつた。

「寝ちゃつたかな?」

無理もないと諦めて、部屋に戻らうとしたところだつた。

「あれ、どうしたの?」真崎が階段を上つてきた。

手には缶の「コーラ」を持っている。それを買いに行つていたようだ。

「あの、少しお話をしたくて。事件の事なんんですけど……」奈美香は上田遣いで話す。

「うーん、前も言つたけど探偵つてそういうことではないからなあ

……「まこつたな、とこうように頭を掻いている。

「でも、何かは考えていますよね？」

「いや、まあ。うーん、いいよ、わかった。けど、明日こしよひ。あんな事があつて僕も眠いんだよ」そう言つて真崎は欠伸をする。

「わかりました。こんな遅くにすいませんでした」奈美香は頭を下げた。

「いいよ、じゃあ、おやすみ」真崎は手を振つて自分の部屋の扉を開けた。

「おやすみなさい」奈美香はもつ一度頭を下げた。

2

結局、奈美香はなかなか寝付けなかつた。そのせいで寝坊してしまつた。怜奈に起こされたて食堂に行つたときには、もうほととぎの人が来ていた。

猪狩、藤井、怜奈と中井もいる。彼女は従業員と思われる若い男と話している。彼が貴裕だらうと奈美香は判断した。真崎と尾崎は向かい合わせで話をしている。事件のことだらう。そのほかには中年の夫婦だけである。彼らとはなかなか接点が持てなかつた。

「おはよう」奈美香は怜奈の隣に座る。

挨拶を交わしたがそれきりで、口数は少なかつた。無理もない話だが、誰もが本調子ではないようだ。

「そういえば、今日、真崎さんと事件の話をするんだけど」奈美香は思い出した事を言つた。

「お、いいな、それ」藤井が食いついてきた。

「面白そうね」怜奈も興味を持つたようだ。

「帰るんじやなかつたのか？」猪狩だけは興味がなさそうである。

「いいじやない、別に一日中話をするわけじやないわよ。今日中には帰るわよ」

「ならいい」猪狩は黙つて食事に手を付けた。

しばらくして、大竹と年配の刑事、竹口といいうらじい、その一人がやってきた。竹口が全員に向かつて話し出した。

「眞さんおはようございます。今日帰る方もいらっしゃると思います。それは構わないのですが、お聞きしたい事がある場合には連絡いたしますので。また、何かお気づきの点があれば遠慮なくおつしやつてください。以上です。失礼します。」

そう言つて二人は去つていつた。

奈美香はコップに水を注ぎに行くついでに眞崎のところまで行つた。眞崎と、尾崎までが彼女を見た。

「あの、昨日のことなんですけど」

「ああ、いいよ。朝食が終わつたら僕の部屋に来てくれるかい？ 彼らも来るんだろう？」

「はい、お願ひします！」奈美香は笑顔を見せる。

3

奈美香は眞崎の部屋をノックした。

しばらくして眞崎が扉を開けた。「やあ、どうぞ」

「失礼しまーす」

四人は眞崎の部屋に入る。すでに荷物が整理され綺麗に片付いていた。

「眞崎さんも今日帰るんですか？」怜奈が聞いた。

「ああ、仕事があるからね。」眞崎は椅子に腰掛けた。四人はベッドの端に腰掛けた。「まったく、とんだ一人旅だ。で、何から聞きたいいんだい？」

「眞崎さんはこの事件どうお考えですか？」奈美香は单刀直入に聞いた。

「どう、ね……」眞崎は考える仕草をする。「たぶん内部犯だらうね。外の誰かがあの状況を作つたとは考えにくい」

四人は頷く。

「あと分かつてているのは、誰にもアリバイがないって事かな」

「そうですか？」奈美香は首をかしげる。

「被害者が発見されたのは九時過ぎ、僕が最後に見たのは食事のとぎだから七時半くらい。彼女、お風呂に来た？」

「いえ、来てないです。」怜奈が答える。「私たち、八時過ぎにお風呂に入りました。」

「お風呂に来たかが確かな証拠にはならないけど、まあ、だいたい七時半から、三十分から一時間の間に彼女は殺されたと考えていいよね。警察が死亡推定時刻を教えてくれれば早いんだけど。その間、何してた？」

「えっと、夕食が終わってからは怜奈と一緒にいたよね？」奈美香は怜奈に確認した。

「うん」怜奈は頷いた。

「俺は部屋にいたかなあ？」八時半くらいに風呂に入つたけど」藤井が首を傾げながら言つ。「俺もです」猪狩は頷かずに答えた。

「みんな、同じようなものだと思つよ。僕も自分の部屋にいたから。ほら、アリバイなんて大したもの持つてないよ」

「それじゃあ、誰にでもできるつて事ですか？」奈美香は腕を組んで考へる。

「そう。だからアリバイからのアプローチは無意味つてこと。煙草吸つていい？」真崎はポケットから煙草を取り出す。

「じゃあ、密室のトリックから、それができた人物を割り出すしかないですね」

「もう一つあるよ」

「動機、ですね。けどそれは私たちにはわかりません」

「賢いね、矢式さん」真崎は煙草に火をつけた。「僕らが考える必要もないし、考へる余地もないんだけど、唯一余地があるとしたら、密室のトリックだろうね。これも必要はないけどね」

「そもそもどうやって部屋に入ったか」と猪狩。

「少なくとも窓ではないわね。さすがに被害者も悲鳴を上げるなり

したと思つ。だから、外部犯説も同じ理由で、なし。内部の人間、つまり、従業員かホテルの客なら何らかの理由をつければ知り合いじゃなくても警戒されずに部屋に入れたんじゃない？」

「親しい人物なら簡単だけど、そういう人が客の中にいた様には見えなかつたし、その辺のつながりは警察が調べるだろうね。動機はどうやつたつて僕らにはわからない。話を密室に戻そつ」

「どんな方法があると思いますか？」藤井が聞いた。

彼は先ほどから腕を組んで難しそうに考え込んでいた様に黙つていた。だが、おそらく何も思い浮かんではないのだろう。

議論はもつぱら奈美香と真崎、そして猪狩が少し口を出すだけで、ほとんど一人で進行している。

「色々あるよ。一番簡単なのはカウンターのマスターキーを使つた。良く考えたらこの鍵があるんだから密室じやないね」真崎が笑いながら言つ。「オーナーの田を盗めば、誰でもできる」

「それは、無理ですよ」怜奈が反論した。「伯父さんに聞いたんですけど、あ、オーナーの事です。マスターキーは持ち出されないよう鍵をかけて保管しているんです。番号式でオーナーしか知らないそうです」

「君、オーナーの姪つ子なんだ？　へえ……じゃあ、この方法はオーナーしかできないね」

真崎は一本目の煙草を灰皿でもみ消した。

「でも、伯父さんにはアリバイがあるんです」

「いつの間に調べたんだよ？」藤井は目を丸くしている。

「気になつたから昨日のうちに調べたの。えつへん」怜奈は笑顔を見せる。「で、アリバイなんですけど伯父さんはその間ずっと事務室で仕事をしていたそうです。アルバイトの高石君が証言します。あ、けど、彼は伯母さんと一緒に夕食の片付けをしていましたので、事務室ですつと一緒にいたわけじゃないみたいなんですね」

「用意がいいね新川さん。他の人のアリバイとかはわかる？」

真崎は一本目の煙草に火をつけた。どうやら、かなり吸う方らし

い。

「いえ、伯父さんたちの事しかわかりませんでした。」

「夏美は食堂にいたって言っていたわ。高石君とお話して、それからお風呂に入つたって言つてたから。たぶん高石君はそのあとずっと夕食の後片付けをしていたのね。だから、アリバイは間違いないと思う。オーナーについても、高石君が見かけているし、奥さんも高石君と一緒にいた。オーナー夫妻も間違いないんじゃないからね」奈美香は説明した。

「オーナーのアリバイは怪しいけど、まあ、仕方ないか。オーナーの奥さんとバイトの子には犯行は無理だね。アリバイトリックをつかえば可能かもしれないけど、今はおいておこう。そもそもアリバイトリックなんて口で言つほど簡単じゃないからね。」

で、夏美つて子のアリバイはちょっと薄いな。食堂から風呂までの間が曖昧だ。そうそう、尾崎さんは部屋で仕事をしてたって言つていた。やつぱり、みんな大したアリバイは持つていね。君たちはどう思う?」

「さつぱり」藤井は両手を挙げてお手上げのポーズをする。

「うーん……」怜奈は考え込んでいるようだが答えは出せないでいるようだ。

「マスター キーが使えないとなると、鍵なしで外から鍵をかけたことになります。もしくは鍵はかかっていなかつた」奈美香はとつておきの考えを言つた。

「ああ、それ面白いね。ということは、鍵がかかっていることを確認した尾崎さんと鍵を開けたオーナーは共犯だね」

「オーナーは確実に鍵を回していた」猪狩が否定した。

奈美香は舌打ちをする。猪狩にとつておきを簡単に覆されてしまった。

「うーん、駄目か……」

「やっぱり鍵はかかっていただろうつね。じゃあ、どうやってかけたかだね」

「色々方法がありますね。よくあるのは糸とかワイヤーを使う方法ですけど」

それは、もちろん小説の中の話である。実際に「よくある」かは知らない。むしろ、滅多にないのではないかと奈美香は思った。

「そんな隙間あつたか？」藤井が尋ねる。

「窓なら？」レバーに糸を巻きつけて上の換気扇から外に出して、引っ張ればレバーが上がって鍵が閉まると思うんだけど」「糸じや換気扇のところが摩擦で切れる。ワイヤーだと傷が付くと思う。釣り糸なんかだと無難かもしれないけど、そもそもつまみいくがどうか」またも、猪狩が否定する。

奈美香は彼を睨んだ。揚げ足ばかり取る猪狩に苛々してきた。

「あんた否定ばつかりしてないで何か自分で意見出しなさいよ！」

「いや、特にない」猪狩は素っ気なく答える。

奈美香は舌打ちしてもう一度睨む。物事を否定できるほど考えられるのならば、必ず、何か思い浮かんでいるだらう。だが、彼はそれをしない。彼女にはそれが不愉快だった。

「まあ、まあ」真崎がなだめた。「それなら、機械を使つた方が良い気がするな。僕はよく知らないけど結構小さなサイズになると思うよ」

「でも、それなら回収しなきゃいけないですよね？」

「うん、問題はそこだよね。誰にも気づかれずに回収しなきゃいけない。あそこにいたのは僕ら以外では尾崎さんとオーナーだね。けど、そんな素振りはなかつたと思うよ」

「あの時、まだ犯人がいたとか？」藤井が思いついたように呟つ。「それは昨日も出たわよ。康平がずっと見ていたから、それはないわよ」奈美香はきつぱりと否定した。

昨日出た案ではあつたが、ちょうど藤井が事情聴取に行つてているときだったので、彼は知らなかつたのだ。藤井はがつかりしたようだ。それなりに自信があつたらしい。

「うーん、そろそろネタ切れかな？」真崎の煙草はすでに五本目にな

なっていた。

「今のところそれらしいのはワイヤーで窓の鍵をかけたか、機械で扉の鍵をかけたか。前者なら犯人は一階の部屋の人ですよね。一度外に出ても、入り口から入つたら鈴の音でわかるから、自分の部屋の窓からホテルに入るしかないわ。後者なら、もちろん一階の人も考えられるけど、尾崎さん……」

「か、ここにいる五人」真崎はイタズラっぽく笑う。

藤井と怜奈は驚いたが、奈美香は微笑み返す。予想できた答えだつたからだ。猪狩は相変わらず無反応だ。

「一階の部屋は誰がいたかな？」

「えつと夏美ちゃんと……」奈美香は考えたが思い浮かばなかつた。

「武井さん夫婦」怜奈が代わりに答える。

「これも調べておいたのだろう。何度も見かけた中年夫婦の事だろう。

「ま、どうにしてもちょっと弱いね。でも、そろそろお開きかな」

「そうですね。ありがとうございました。」奈美香は頭を下げる。四人は立ち上がり部屋から出て行こうとした。

「君の意見を聞いてないね。猪狩君」

また真崎は煙草をふかしていた。

「秋山美冬さんって、変わつた名前ですね。秋なのに、冬です」

奈美香は呆気にとられた。怜奈と藤井も同じように口を開けている。真崎だけが微笑んでいた。

「事件については？」

「さあ……わかりません。何かを忘れているのか、答えは出ていません」

そのまま猪狩は出て行つた。

五章 移動する彼らの諦念と移行する彼の論究について

1

「結局分からなかつたわね」帰りの電車の中で奈美香が言った。真崎もS市に住んでいるらしいが、車で来ていた。なので帰りも猪狩、藤井、奈美香、怜奈と来たときの四人となつた。

ボックス席に座り、男性一人が進行方向とは逆の席に着いた。猪狩が窓側だつた。こういったことはたいてい男性が讓歩しなくてはならない。男女平等とはまた違つた概念だ。男尊女卑のリバウンドかもしれない。だが、別に猪狩に不満はなかつた。

猪狩は窓の桟に肘をついてずっと窓から海を眺めていた。だが、風景は脳内に響いてこなかつた。

「ま、俺ら素人だし。警察に任せらしかなかつたんだよ」藤井が言う。

「けど、悔しいね。あつ、ごめん不謹慎だね、これ」怜奈は眉を顰めた。人が死んでいるのを思い出したのだろう。

「けど、まだ詰めれそうじゃない? とりあえず、尾崎さんは犯人じゃないと思うの」奈美香が言い出した。

怜奈と藤井は奈美香に注目した。猪狩は窓を向いたまま聞くことにした。

「二階にいたからか?」

「厳密に言つとちょっと違うけど。あの時間みんな自分の部屋にいた。だから、犯人は堂々とドアから入つた。どういう口実を使つたかはわからないけど。とりあえず疑いを持たれずに部屋に入つた。そういう点では尾崎さんにもできる。

けど彼の場合、密室にする方法が思い浮かばないのよ。真崎さんが言つたように機械を使ったとしても回収しなきゃいけないし。やっぱり一階にいた人の方がリスクは低いと思うの」

「じゃあ、夏美ちゃんが武井さんたち？ そういえばあの夫婦のことが全然わからないよね」

「やっぱ、彼らが一番怪しい。けど一番怪しまれるのに殺したりするかしら？」

「それはミステリーの読みすぎなんじゃねえの？ やつぱ一番怪しいやつが犯人でいいとおもうけどなあ」

「そもそも、怪しいって言つても、私たちと接点がなかつたってだけだよね。もしかしたら、他の人たちとは交流があつたかも」

「うーん……」

「オーナー夫妻のアリバイには高石が絡んでいる」猪狩は口を開いた。

三人は飛び上りそうになつた。

「うわっ！ びっくりしたお前聞いてたのかよ」藤井が胸に手を当てている。よほど驚いたようだ。

驚きすぎだらうと猪狩は内心で呆れた。

「何？ ジゃあ、康平はオーナー夫妻が高石君と共犯だつて言つたの？ どっちが？」奈美香は顔を顰めながら聞いた。

「そうは言つてない。それに共犯じゃなくても方法があるかもしない」

「アリバイトリック？ 何があるかしら？」

「さあ？ それは知らない」

実際、何も考えていなかつた。考へる必要もないと思つたのだ。そう言つて、また窓の方に視線を戻した。

奈美香の舌打ちが聞こえた。

最近、奈美香の舌打ちが多くなつたように思える。さらに言つながらその対象は自分だけのようだ。女性の舌打ちは印象が悪くなるし、自分に対してのみ行われるというのも気に入らない。自重してほしいと思つた。

三人で議論が再開されたようだが、猪狩は今度は聞いていなかつた。自分の思考を脳内で循環させることに努めた。

結局、議論はまとまらなかつたようだ。

やがてJ駅に着いた。駅の時計は四時四十五分を指していた。

帰路に着くと、まず怜奈と別れた。彼女だけ方向が違うのだ。そして地下鉄に乗り換えて、二つ目の駅で藤井が降りた。その次の駅で猪狩と奈美香は降りた。歩いて二十分ほどで一人の住む住宅街である。自転車だともつと早いのだが、今回は荷物が多く自転車に乗せられなかつたので、歩いて来ていた。

猪狩は黙つていた。珍しく奈美香も黙つていた。彼女は事件について考えているようだつた。

実は、猪狩も事件について考えていた。好奇心とも違つ何かが自身を動かしているのだ。

おそらく、とんちのきいた街頭のポスターと同じだ。たいてい、意味がわかつても面白くない。さらに悪いことに、解いたところで何の利点もない。けれど、目の前に提示されると、少し考え込んでしまう。好奇心などという大それたものではない。未解決のままで放置されているのが気に入らない、その程度のものだ。

何か忘れている。そう真崎に言つた。だが、そうではないような気がしていた。

何かを間違えているのか。そちらの方が少ししつくらぐ。どちらでも同じだろうか。

なぜ、密室なのか。まず、その命題を解かなくてはいけない。この場合、密室は単に不可能を示しているだけだ。誰にもできない、だから自分にもできない。アリバイを確保できないから、そうせざるを得なかつただけだ。

非常に幼稚な考え方だ。コストパフォーマンスが低い。

他にも疑問点はある。

あのホテルでなくてはいけなかつたのか。

通り魔で殺してはいけなかつたのか。

自殺に見せかけることはできなかつたのか。

この命題を後回しにしたところで、肝心の問題が残つている。

どうやって密室にしたのだろうか。これがわからない限り、犯人の思う壺ということになる。

何かを見落としているのだろうか。

うつ伏せの死体、刺さったナイフ。滲み出る血。テーブルの上。そして、そこにあつた鍵。

被害者を最後に見たのはいつだったか。

夕食のとき？

時計は？隠してあつたと言っていた。

起きた事象をすべて思い出す。穴だらけの方程式にそれらをつぎ込んで、計算する。

条件式も設定して、無駄をそぎ落していく。

ああ、

そうか。

猪狩は笑ってしまった。これは嘲笑だ。

「うわっ！ びっくりした……どうしたの、急に？」奈美香が睨んでいる。

だが、全く気にならなかつた。それどころではなかつた。自分自身に呆れて、笑わずにいられなかつた。

「いや、別に」猪狩はそう答えた。

だが、猪狩は笑いを堪えることができなかつた。

「何よ、気持ち悪い」

「いや、別に」猪狩は繰り返した。

すでに、猪狩たちの家に近いところまで来ていた。スーパーや書店、ホームセンターなどが建つ大きな通りから、内側に入り、こじんまりとした住宅地へと到着する。

やがて、奈美香の家に着いた。

「じゃあ、また」奈美香が手を挙げる。

「ああ」

それだけ言って立ち去ろうとした。

「あんた、なんか思いついたの？」

奈美香が言ったので、足を止めた。

「いや、別に」何度も同じ返答を猪狩はした。

「ああ、そう。じゃ」

奈美香は納得していないうやで、訝しげに猪狩を見て首を傾げたが、結局家中へと入つていった。

猪狩の家はそこから五分ほどだった。

砂利が敷き詰められた家の前には今は何もない。車がないということは、父は休日出勤しているらしい。最近は厚生労働省がつるさいらしいが、それでも中小企業に勤める父は休日出勤をやめる気はないらしい。

家の横には小さな家庭菜園があり、その手前には軽自動車が止まつていて。母はいるようだ。

「ただいま」

「お帰り」

リビングに入ると母の涼子が台所から顔を出した。

猪狩はとりあえず荷物をリビングの端に下ろし、ソファに座りこんだ。

「どうだった？」

涼子は夕食の支度の途中だつたらしく、エプロン姿で包丁を持ったままリビングに入ってきた。自然と刃先が猪狩の方を向く。

「包丁持つたまま来るな」

「いいじゃない、刺すわけじゃないんだから」

そう言いながら涼子は包丁を突き出して刺す真似をした。猪狩が

睨むと彼女は肩を竦めた。

「で、どうだったの？」

「散々だつた」

猪狩が言うと、涼子はため息をついた。

「あんたねえ、そもそも楽しもつとしなかつたでしょ、う？」

「いや。楽しかつたよ。たぶん。そつちは」

涼子は首を傾げる。

「いや、あんた散々だつたつて……」

「ねえ、タウンページある？」

「は？ あるけど、電話の下に」

「あ、そう」

猪狩は電話台の戸を開けて、電話帳を取り出した。

「何でこんな子に育つたのかねえ……」

涼子は再びため息をついた。

2

海から帰つて来た翌日の月曜日、奈美香は猪狩の家に向かつていった。彼が何か思いついたように思えてならなかつたからだ。

奈美香にはまだわからない。いくつも可能性を挙げては消去。それの繰り返しである。答えにはたどり着きそうにもない。

条件が足りないのか、もしくは間違つているのか。

動機について調べる力がないのが痛い。おそらく、警察の捜査とはそこが出発点のはずだ。それができないのは、ハンディキャップとして大きい。

そのうちに、警察が動機から犯人を割り出すかもしれない。

しかし、まだ先のはずだ。動機がわかつても手法はまだわからないうだろう。

だが、何か動かぬ証拠を見つけるかもしれない。犯人の毛髪が見つかるかもしれない。被害者の爪に犯人の皮膚が付着しているかもしれない。そうなれば密室のトリックなど意味を成さないだろう。そう考えると自分達は情報が圧倒的に少ないし、やつてている事も無

意味に思ってきた。

いや、無意味は百も承知だつた。観測された不合理が氣に入らないだけの事だつた。

そう考えてこゝにうちに猪狩の家に着いた。インターフォンを鳴らす。

「はい」女の声だ。おそらく母の涼子だらう。

「あ、おはよう」やういします。矢式です」こつもよつも高い声で言つ。涼子と話すときは常にやうだつた。

「あら、ちよつと待つてね」

しばらくの間があつた。そして扉が開く。

「おはよう。奈美香ちゃん」涼子が微笑んで出迎えてくれた。

「おはよう」やういます、おばさん」奈美香は頭を下げた。「康平君

いますか?

「それがねえ、朝からビンが出かけていったのよ。」めんね「彼女は申し訳なさそうに言つ。

「どこに行つたかわかりますか?」

「それが、わからぬのよ。出かけてくるつて、それだけ」

「そうですか……」

「ああ、でも昨日、帰つてくるなりタウンページ見てたわね」「タウンページ……」わかりました。ありがとうございました」めんねえ

「ごめんねえ」

再び涼子が謝罪して、扉が閉められた。

猪狩は何を調べていたのだろうか。

帰つてくるなり、ということは、事件がらみなのだらう。真崎の事務所だらうかと奈美香は考える。

彼はやはり何かに気付いたのだらう。奈美香は行つてみる事にした。

だが、一步踏み出して、足を止めた。猪狩の家のインターフォンを再び押した。

「はい?」

「あの、タウンページ貸してもいいませんか?」

六章 解決する表層の結果と解決しない深層の心理について

1

猪狩は地下鉄の駅から出た。

市の中心地からわずかに外れた場所だつた。車の通りも多く、背の高いビルもあるが、よく見るとひび割れなどを起こしている建物も多く、真新しいものは見られない。交通量が多いのも、単純に市街に向かうための通り道だというだけというのが答えるようだ。

猪狩はあるビルの前に立つていた。三階建てのビルで、一階の窓には「真崎探偵事務所」と書かれていた。階段を上り、扉の前で止まる。一度深呼吸をして扉をノックした。

しばらくの沈黙の後「どうぞ」という声。猪狩は中に入った。部屋の中は整理整頓が行き届いていた。入つて左の窓際にはデスク。その前に接客用のソファーとテーブル。ソファはテーブルを挟んで向かい合いつになつていた。

右側には食器棚と小さなガスコンロ、水道もあり、真崎はそこでお湯を沸かしていた。

「やあ、やつぱり君だつたか」真崎は微笑む。「二十パーセントくらいで矢式さんかなと思つたんだけど」

猪狩は黙つている。

「コーヒー飲むかい？ インスタントだけど」

猪狩は黙つて首を横に振つた。

ヤカンが音を立てるとき、真崎は火を止めて、取つ手に布巾をかぶせて、マグカップにお湯を注いだ。

結局、二人分の「コーヒーを入れて真崎が猪狩の方に歩いてくる。

「まあ、座つてよ」

猪狩はソファに座つた。真崎も反対のソファに座る。猪狩の前にマグカップを差し出した。

「お客様に何も出さないってのもね」

真崎はカップに息を吹きかけて冷ますと一口「コーヒー」を飲んだ。

猪狩は手を付けなかつた。

「さて、今日は何しに？ 何かの依頼つてわけじゃないだろ？」「

「奈美香が来るかも、って言いましたよね」

「ああ……」真崎は手を額に当てて苦笑した。『迂闊だつたね、そ

れは』

「つまり、わかっているんでしょ？』

「犯人がわかつたつてことだろ？』

「そうです」

「じゃあ、聞かせてもらおうかな』

猪狩は真崎を睨んだ。

「睨まないでくれよ。はあ……』 真崎はため息をつく。『その様子だと本当にわかつているみたいだね』

「ええ』

猪狩は次の言葉を躊躇した。しかし、決心して言った。

「どうして、殺した？』

2

真崎は黙つてコーヒーに口をつけた。カップをテーブルに置くと、やがて言った。

「どうして？ 君がそれを聞くとは思わなかつたな。興味がないと思つていた』

「何かしらの弁解が聞けると思つただけです』

「弁解、ね……。ないよ、そんなもの。僕は秋山美冬を殺した。動機はある。けれどそれを人に話す意味があるとは思わない。人を殺した罪は変わらないし、同情も求めていない。それよりも、君がどうやつて気づいたか気になるな』

「時計」簡単に答える。

「ああ、あれはまづかつた」

「なんで密室にしたんですか？」

「ああ、何でだろうね。気づいてほしかつたのかな？ 君みたいな誰かに。確かに密室にする事で、事象の不可能性で身を守る事と、気づかれる事によるリスクを天秤にかけてのことではあつたけど。だけど、賢い人間ならすぐ気づくだろうからね」

そう言つてから真崎は煙草を取り出し、火をつける。

「でも実際のところ、一番楽な殺し方は通り魔に見せかけた殺人だよね。そして、一番安全なのが、自殺に見せかけることだ。けど彼女の場合、ガードが固くてどちらも無理だつたんだ。で、思いついたのが密室。通り魔では殺せない。自殺に見せかけるのも無理。ならこういう閉鎖的環境で殺すしかない、ならば普通に殺すよりは密室殺人の方が安全と考えた。それだけ。ただ、誰かは気づくと思つた。そして、それならそれでもいいと思つた」

猪狩は何も喋らない。どう切り出したらしいか、わからなかつた。

「自首はするよ」猪狩の気持ちを察したかのように言つた。

「ばれたから君を殺す。なんてことはないよ。君が気づかなくとも自首していたかもしぬれない。ばれないように色々と細工をしたわけだけど、結局罪の意識から逃れられなくてね」

「じゃあ、なんで……」

「人を殺そうとする人間の気持ちがわかる？」真崎が聞いてくる。論面がずれていると思ったが、猪狩は答える。

「いや、わからない。わかりたくもない」

「そう。……それが正解だ」

しばらくの間、沈黙があつた。

「彼女も来るのかい？」口を開いたのは真崎だつた。

猪狩はすぐに、奈美香のことだとわかつた。だが、彼の言い方が「She」のこととも「Girlfriend」のこととも取れるユアンスだつた。猪狩は「She」の事だと思う事にした。

「いや、知らない」

「来ると思うよ。たぶん彼女も気づく。彼女の場合、頭の回転が速いけど無駄が多い。可能性を片つ端から挙げていくからね。君の倍くらいアイディアがあると思うよ。」

そして君はあの時一つも意見を出さなかつた。それは、意見が無いんじやなくて少しでも非合理的な意見は排除しているんじやないかな、って思った。勘だけど。

つまり、彼女はとりあえず、数字を埋めてみるんだ。そして、君はしつかりと方程式を組んでから解く、そして答える「

猪狩は驚いた。彼の言つことは、自分の自覚とまったく同じだつたからだ。

「だから、彼女じやなくて君が来ると思つた。君の思考には無駄がない」

再び沈黙。真崎は煙草の火を消した。

「じゃあ、そろそろ行くかな」

彼は立ち上がり、扉へと向かつた。

3

奈美香は走つていた。気づいてしまつた。急いでどうなるわけでもない。会つてどうなるわけでもない。どうするわけでもない。だが走つていた。人通りは少なかつた。たまにすれ違う人々は、走つている奈美香を怪訝そうに見つめるが彼女は氣にも留めなかつた。

「たぶん、この辺……」

奈美香は真崎探偵事務所の場所を知らなかつた。住所だけ調べて、だいたいの位置だけ覚えて、ゆっくり探そうと思つてきた。しかし途中で気づいてしまつた。それからはもう、じつとしていられなかつた。

信号機に表示してある住所を頼りにひたすら走つてきた。信号が赤になり交差点で止まつた。膝に手をつき、息も切れはじ

めていた。

「あ……」

顔を上げると交差点の反対側に真崎が立っていた。彼もこちらに気付いたようだ。微笑んでいるように見える。

信号が青になつた。

奈美香は動かなかつた。真崎はこちらに歩いてくる。

「やあ、こんにちは」真崎はやはり微笑んでいた。「やつぱり、気づいたね」

「ええ」奈美香も微笑み返す。「残念です」

「さようなら」

真崎はそれだけ言つて通り過ぎる。

「さようなら」

奈美香もそれだけ返す。奈美香は振り返つて、真崎の背中を見えなくなるまで見つめていた。

意外とドライなものだと思った。知り合つて数日しか経つていないのは確かだが、自分が彼に好意を持っていたのも確かである。いつも冷静でいられる理由はわからなかつた。案外、自分の感情を自分で理解できるほど人間はよくできているわけではないのかもしれないと思つた。

「よお」後ろから声がした。

「あ、康平」

「おつ」

何を話せば良いかわからなかつた。もっとも、猪狩は話す氣すらないかもしない。居心地の悪い時間だつた。

「帰ろうか」猪狩はそれだけ言つた。

「うん」奈美香は頷く。

なんだか、安心した気がした。

「いや、全然わからないんだけど」

四人は藤井の部屋にいた。彼はアパートに一人暮らしである。海で飲めなかつた酒は藤井がすべて預かっていた。早いうちに飲んでしまおうということで、彼の家でいわゆる「宅飲み」が開催されたのである。

先ほどの台詞を発したのは藤井だった。

「私もわからない」怜奈が頷く。「どうやって真崎さんが？　まさか本当に機械でも使つたの？」

「違う。もつと簡単だよ」猪狩が答える。「テーブルの上にあつた鍵はある部屋の鍵じゃなかつた」

「え？」一人は驚きを隠さずに目を見開いた。

「あの鍵は別の鍵で、つまり、真崎さんの部屋の鍵だ。あの部屋の鍵は彼が持つっていた。それで鍵をかけて、第一発見者になつて鍵を元に戻す。探偵という職業なら、場を仕切ると踏んだんだろう。誰も部屋に入れずに隙を見て鍵をすり替えた。たぶんハンカチで鍵を取つたときだろうね。その中に本当の鍵が入つていた」

「だから、夕食のときに探偵だつて言つたのよ。私が聞かなくても、自分から話していだでしょ？」

「でも、どうやつて部屋に入つたの？」怜奈が首を傾げる。

「推測だけど」と前置きして猪狩は言つ。「被害者は真崎さんが探偵だと言つたときに、反応してこつちを見た。探偵に相談したい事があつたんだろう。そして、そう仕向けたのはたぶん真崎さん本人」「なるほど、でもどうして？　動機は？」

「それは知らない。真崎さんは通り魔に見せかけて殺すにはガードが固すぎた、と言つていたから、彼女は殺される事を自覚していたんだろう。それ程のことをしていた。そして、その対象が真崎さんだつた。それと、例えば、そのことで脅迫状かなにかを送れば探偵に相談したがるんじゃないかな」

「なるほど、警察には言えないしな」藤井は感心している。怜奈も頷いている。奈美香はわかっている、といつた顔をしている。

「全部推測だよ」

「そもそも、どうしてわかつたんだ？」

「時計が鳴つた」

「時計？ ああ、やっぱりあれって時計だつたの？」

「ということは死体に気がついてほしかつたということだと思つた。そうしないと鍵をすり替えられないから」

「でも、ちょっと杜撰よね。時計を鳴らすなんて不自然すぎるもの」奈美香はふと思いついた。「気づいてほしかつた」

「え？」

「そう言つていた」

「よくわからない。密室にまでしておいて、気づいてほしかつたって……」

「わからないのが普通だ。俺たちは人を殺した事がないからな」

「まあ、そうだけど……」

「はいはい、もうやめ。犯人は捕まつたし、トリックもわかつたし、もうこの件は終わりにしよう。せつかく飲んでるんだから、くらーい話はやめようぜ」藤井が提案する。

三人もそれに賛成した。結局、物騒な話なんてしたくはないのだ。

翌日、猪狩は昼近くまで寝ていた。

「うえ……頭痛え。一日酔いだ……」時計を見ると十一時五十一分。「水……」呻きながらベッドから起き上がり、一階へ向かう。

「おはよっ」猪狩は台所にいた母の涼子に挨拶をした。

「こんにちは」涼子は微笑んだ。

猪狩にはその表情が皮肉っぽく見えた。言葉も然り、こんな時間まで寝ているなどいひじだらう。何も言い返せなかつたので黙つていた。

食器棚からコップを取り出し、冷蔵庫の水を注ぐ。そこでインターネットが鳴つた。

「はいはーい」涼子は今のほうへと向かう。

猪狩は、日本人は不思議だと思った。返事をしても聞こえないのに返事をする。それに相手には見えないのに電話の相手にお辞儀をしたりするのも一緒だ。あればどういう心理なのだろうと考えたが、二日酔いで頭が痛いので中断。

「はい、ええ……はい」涼子は受話器で話をしている。

受話器を置くと玄関のほうへ歩いていった。

今日は何をしようか、というよりも何もしたくない。気持ちが悪い、奈美香が無理矢理飲ませてきたせいで。今日はずっと寝ていようか。などと考えていると涼子が猪狩の方にやつてきた。

「あんた、何したの？」涼子が神妙な顔で聞いてくる。

「は？」猪狩には何の事だかわからない。

「警察

「へ？ 何もしてないよ、俺」

「知らないわよ。あんたに用があるつて」

「訳もわからないまま、立ち上がり玄関へ向かう。

「ちょっと、着替えてからにしなさい！」涼子が叫んだ。

「どうも、道警の伊勢と申します」

伊勢と名乗った男はは今に通されソファに座っている。猪狩はクッショングに座つて向かい合つている。

涼子が麦茶を運んでくる。

「あ、お構いなく」伊勢は片手を挙げた。

「で、何の用ですか？」猪狩は棘々しく言つた。

今日は気分が悪いのだ。そこに警察なんかが来ては、たまつたものではない。

「ごめんね、すぐ終わるよ」

「ただの一日前で、お構いなく」涼子が言つ。

猪狩は涼子を睨んだが、彼女は気にせず部屋を出て行つた。

「まあ、和哉の事なんだけど」伊勢が話を切り出した。

「和哉？」

「ああ、真崎つて言つた方がいいかな？」

「あ、はい。知り合いだつたんですか？」

「知り合いつて言つたが、親友だね。そして過去形でもない」伊勢は微笑んだ。「あいつはいいやつだつたよ。いや、いいやつだよ。あいつは人殺しだけど、いいやつで、俺の親友であることに変わりはない。もちろん彼のやつたことは許されることではないけど、いいやつであるということは無関係だ。わかるかな？」

猪狩はわかつた、ような気がした。もし、奈美香や藤井、怜奈が人を殺したら同じ事を言つだらうか。

「たぶん」とだけ答えた。

「そう、それは良かつた」伊勢はにっこりと笑つた。

「で、どうして來たんですか？ 彼は自首でしよう？ 僕には関係ない」と思つんんですけど」

「うん、今日は非公式だから。和哉が自首する前に電話があつてね。びっくりしたよ、人を殺したから自首するつて。で、その時、君のことを聞いたわけ。なんとなく嬉しそうだったよ」

三十分ほど話して、伊勢は帰つていった。現場からは特に重要な証拠は残つていなかつたという。指紋も毛髪も皮膚も検出されなかつた。時計とナイフからウラを取れるかも知れないが、時間がかかりそうだ、自白だけじゃ立件できないから大変だと言つていた。

証拠が無かつたにも関わらず彼は罪を認めた。やはり彼は自分の罪の重さに耐えられなかつたのだろう。

動機も言つていたが猪狩は忘れてしまつた。人が殺人を犯す事になつた経緯など興味はなかつた。

ただし、それは殺人という行為を軽視しているという意味ではない。殺人は世界に容認されではおらず、動機は関係がないという事でだ。

だいたいは猪狩の想像した通り、個人的な恨みから（と言つても彼と秋山美冬とは面識がなかつた。親族を巻き込んだ事件に彼女が関わつていたようである）殺す機会をつかがつていたといった内容だつたと思う。そのために探偵になつたとも言つていた気がする。警察は彼女が関わつていた事件も捜査し直すことだ。

人を殺そうとする人間の気持ちがわかる？ 真崎はそう聞いてきた。

わかりたくない。 そう猪狩は答えた。

それが正解。 彼はそう言つた。

彼は正解を知つていた。しかし、彼は正解することはなかつた。そして実行してしまつた。

殺人という不正解を。

それは、とても悲しいことに思えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0266ba/>

それが正解 改訂版

2012年1月5日20時55分発行